

東日本大震災・原子力災害
アーカイブ拠点施設整備事業の概要について

平成29年12月

福島県

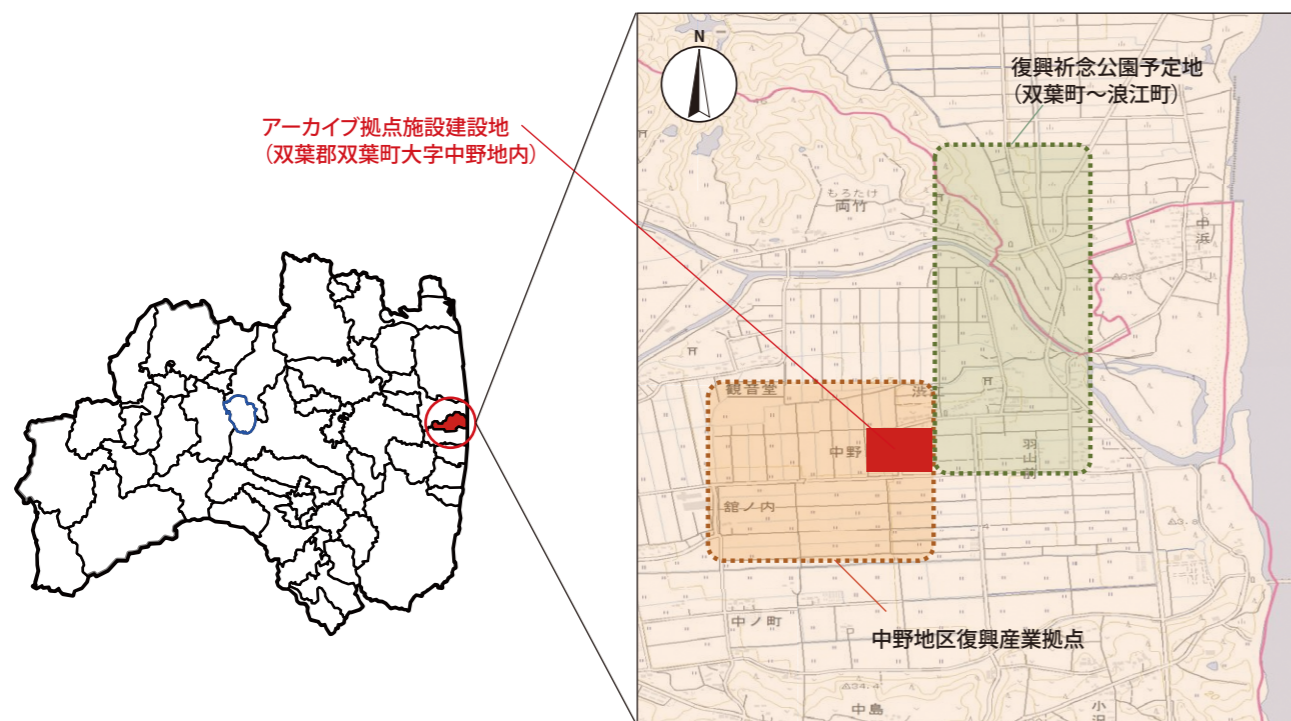
目次

1. 建築計画概要・設計コンセプト等	1
2. 外観イメージ	2
3. 展示内容	3

■建築計画概要

施設名称	東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設
建設地	双葉郡双葉町大字中野地内(下図参照)
主要用途	展示施設
施設諸室	展示エリア、サービス・収蔵エリア、管理・研究エリア、研修・会議エリア、共用エリア等
構造	鉄筋コンクリート構造(一部鉄骨造)
階数	地上2階
敷地面積	約35,000㎡
延床面積	約5,200㎡ (1F:約2,700㎡、2F:約2,500㎡)
駐車台数	大型バス:10台程度、普通車:100台程度
その他	太陽光発電設備等

■案内図



■建築設計コンセプト

1. 未来をひらく交流の場

○「みらい」へのゲートウェイとして、福島のような地域・施設をつなげる起点になるとともに、複合災害の記録や教訓を伝え、それを生かした研究や研修を行う場として様々な方々が交流できる場所をつくります。

2. 復興祈念公園、産業交流センターとの連携

○建設敷地の東に隣接する復興祈念公園や同じ街区内に建設される産業交流センターをアクティビティパスで連続させ、各施設の連携を図りながら、このエリアの一体感を生み出します。

3. 四方から見えるモニュメンタルな建築

○アーカイブ広場や復興祈念公園に対して開かれた施設とするため、大きなガラス面を用いて透明性を高めるほか、地域の象徴となる建築として周辺環境にも配慮したモニュメンタルなデザインとします。

4. 語り部が伝える学びの場

○原子力災害を含む複合災害を後世に伝承するため、震災の体験者による震災語りが重要となることから、テラスやエントランスホールなど語り部が活動しやすいスペースを設けます。

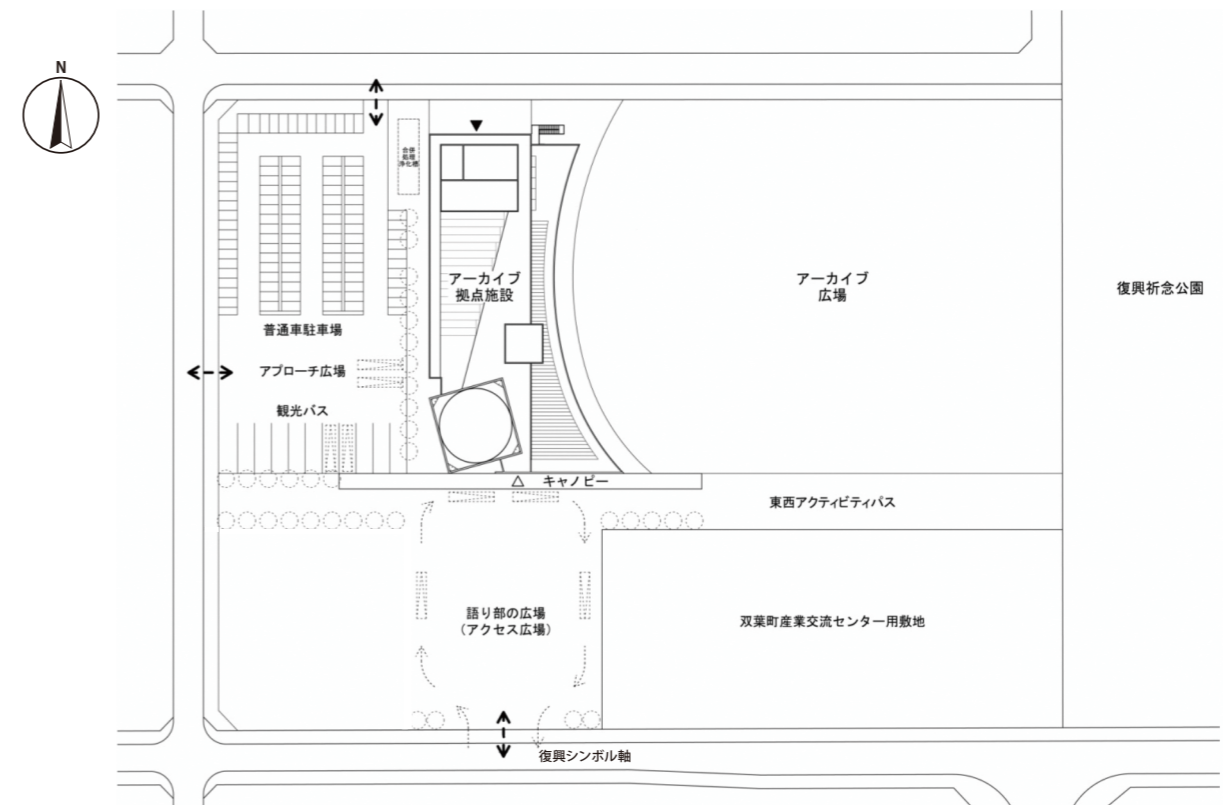
5. 建築と展示ストーリーの一体化

○来館者を展示空間に引き込む緩やかなスロープを効果的に配置するほか、観覧後は目の前にある公園や海を感じながらストーリーを振り返り、複合災害への思いを巡らすことができる空間構成とします。

6. 貴重な資料の保存と継承

○本敷地は、津波による浸水の恐れはほぼないと言われていますが、今回の災害から学んだ想定外への教訓を生かし、万が一に備えて収蔵庫・展示室を2階に配置するなど、原子力災害を物語る貴重な資料を確実に保存・継承していきます。

■配置図

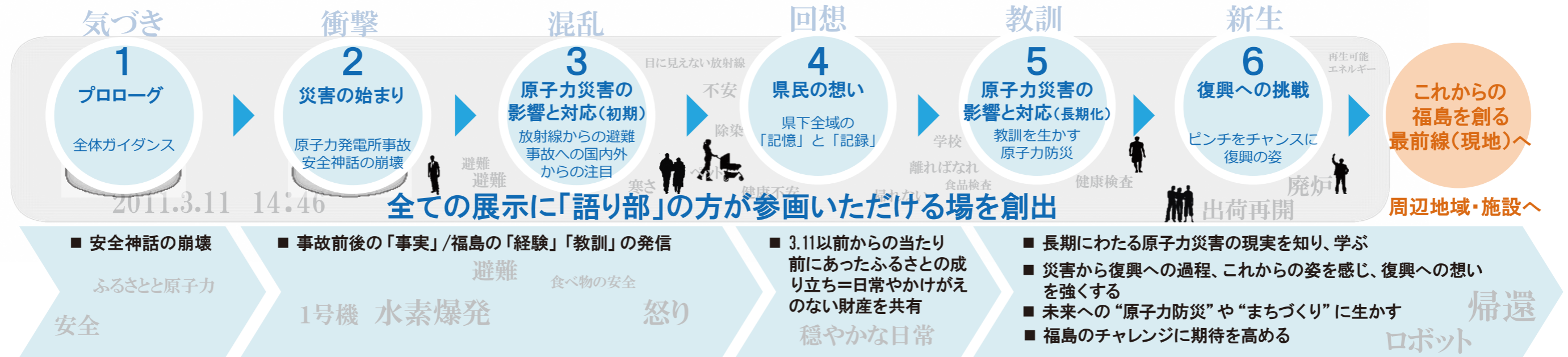


■外観イメージ



南東側から見る

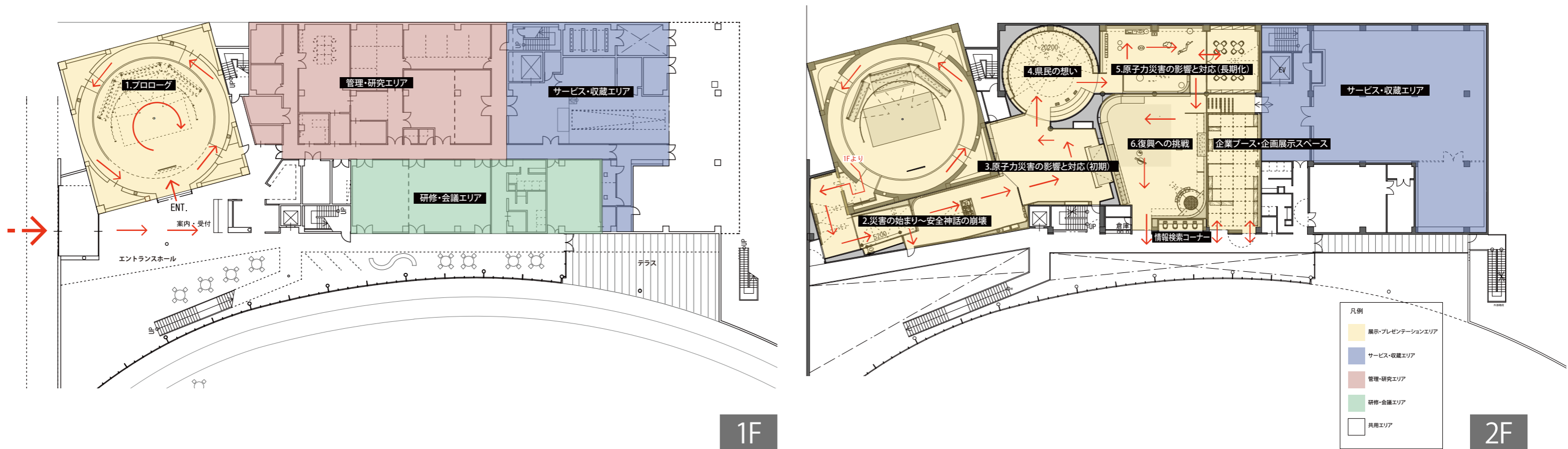
■展示ストーリー



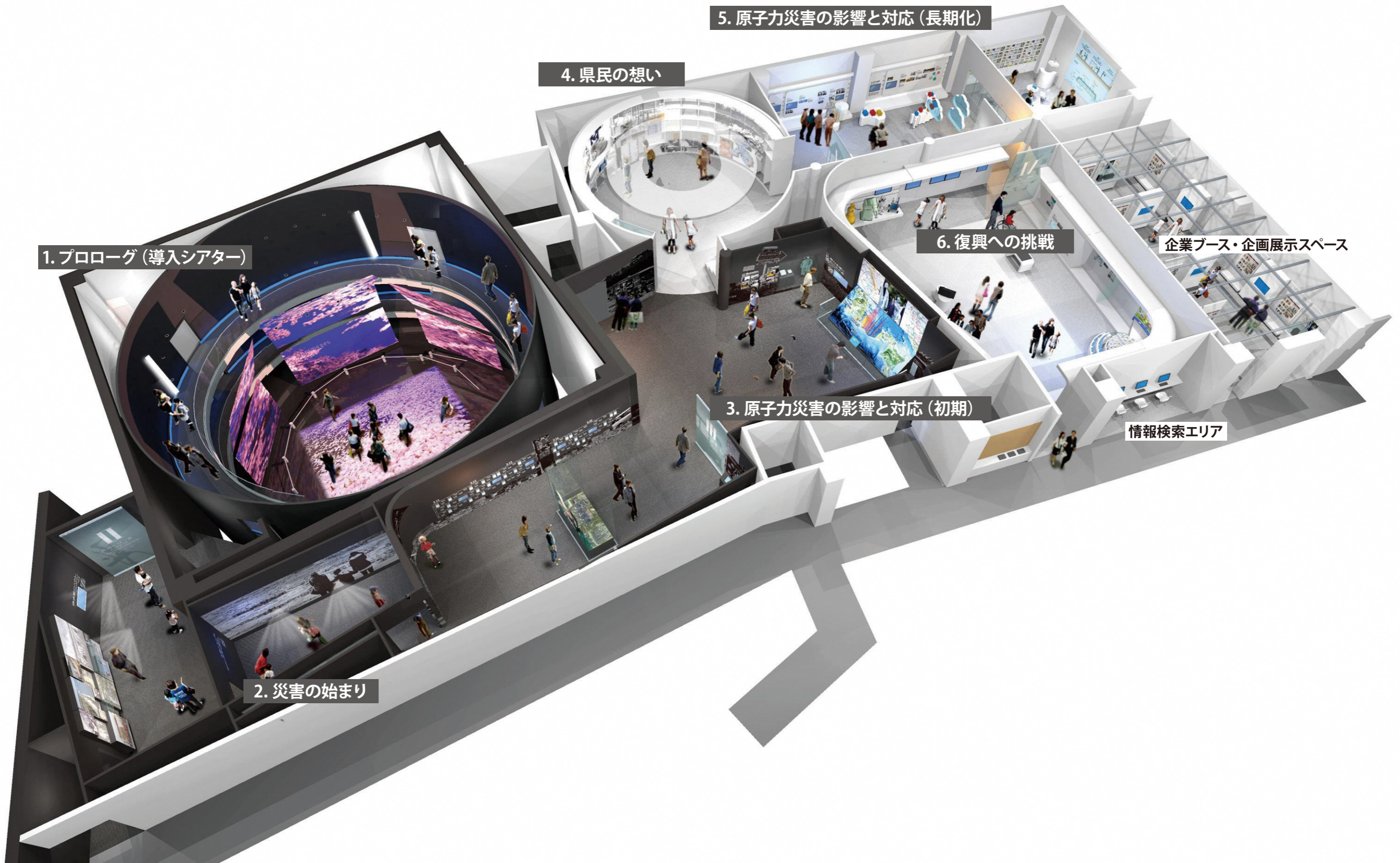
■動線計画・ゾーニングについて

展示ストーリーを重視した明快な動線計画の採用

- 展示や体験、プレゼンテーションを通して、福島のことを正確に知ってもらい、何かしらの成果を持ち帰ってもらうために、ゾーンごとに展示を見ていく一筆書きの強制動線とする。
- 展示エントランスは、「受付・事務機能との連携」及び「2階に配置されたメインの展示・プレゼンテーションエリアへの誘導」を考慮し、1階に設けプロローグ（導入シアター）を介して2階にアプローチする計画とする。
- 展示全体を通して、語り部の方がそれぞれの知識や経験を活かして、事故前の暮らしから、被災時やその後の対応、そして復興へと向けた歩みを説明できる構成とする。



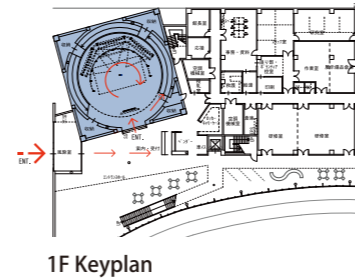
■展示室全体イメージ



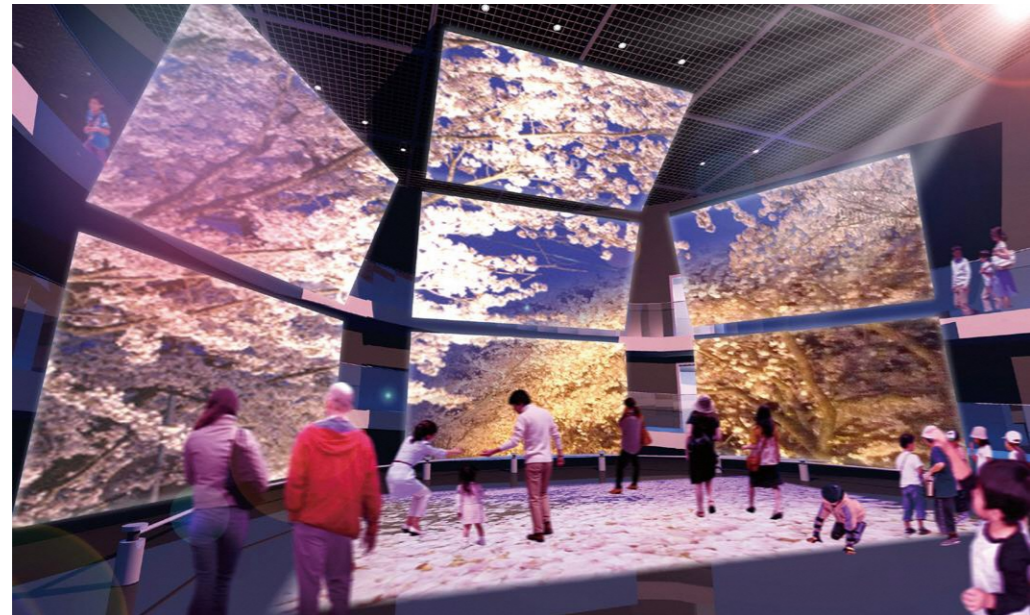
1. プロローグ (導入シアター)

【概要】
 原子力発電所が地域の生活と共にあり、その安全性を信頼してきた人々。しかし、それまでの安全神話が3.11の震災をきっかけに一瞬のうちに崩壊した。「災害」という形で、全く予期していなかったことがある日突然襲いかかり、これまで経験したことのない事態に、手探りで対応した住民や行政。プロローグ映像では、日常が突然災害により一変するということを、意識させるきっかけをつくる。そしてこれから見学する展示全体を通して、この災害の「自分事化」のファーストステップとして、ガイドの役割を担う。

【展示項目】
 ・導入映像・通路展示

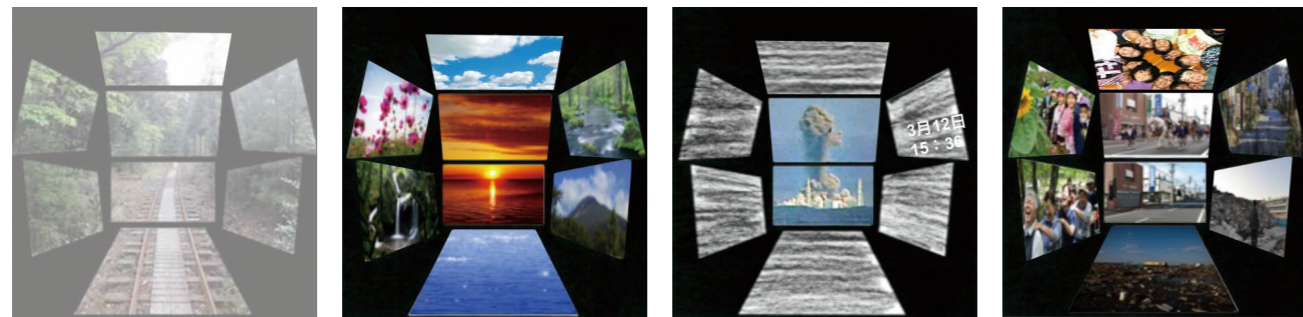


■展示イメージ



【導入映像】
 「事故前の日常」や「原子力災害のさまざまな側面」、そして「県民それぞれの想い」といった“記録”と“記憶”を埋もれさせることなく没入感・臨場感の高い演出で伝え、災害を自分事として受け入れてもらう。

〈コンテンツイメージ〉



●原子力発電所建設前の地域の状況

石油・原子力等へのエネルギーの転換が進んだことにより、地域の産業構造にも変化が生じた。

●事故前の日常

原子力発電所が建設され、行事や催事など平穏な地域の暮らしが営まれていた。

●災害の始まり

地震、津波、そして原子力発電所事故から日常が一変し、混乱、不安、恐怖が人々を襲い、厳しい避難が始まる。

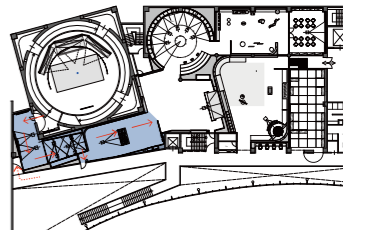
●原子力災害から故郷への帰還へ

原子力災害は今もなお続くが、除染等の取組により放射線量が減少し、徐々に故郷への帰還が進んでいる。

2. 災害の始まり ～安全神話の崩壊～

【概要】
 原子力災害の前の平穏な暮らし、そのあたり前の日常を一変させた“地震”と“津波”、それに続く原子力発電所事故。誰もが初めて経験するこの複合災害の発生時に、国・県・市町村等行政組織、民間事業者等がどのように対応したのか、青天の霹靂のような事態に県民はどのような気持ちで受け止め、行動したのか。事故前、事故当時、事故直後の記録を時系列でたどり、様々な資料、証言、事故調査の記録から、原子力発電所事故の始まりを克明に、臨場感と共に描き出していく。

【展示項目】
 ・事故前の暮らし
 ・東日本大震災 ～地震と津波の記録～
 ・原子力発電所事故の発生



■展示イメージ



【事故前の暮らし】

祭りや行事、学校生活、商店の賑わいなど、失われた事故前の日常を共有し、被災者への共感を生み出す。

【東日本大震災～地震と津波の記録～】

原子力発電所事故のきっかけとなった地震と津波を象徴的に表現し、その瞬間からすべてが変わってしまったことを伝える。

【原子力発電所事故の発生】

原子力発電所事故を克明に表し、災害は起こりえるということを伝え、それに対する備えについて考えるきっかけとする。

【展示資料イメージ】



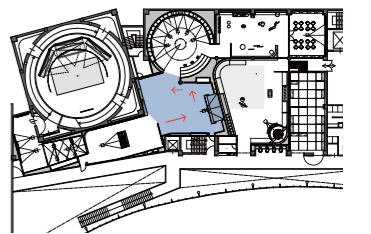
災害発生直前の様子

水素爆発の瞬間の映像

3. 原子力災害の影響と対応 (初期) ～放射線からの避難、事故への国内外からの注目～

【概要】
 着の身着のままの避難/情報の錯綜/避難生活の変遷。誰もが初めて経験する原子力災害直後の状況を、避難などの様子からその特殊性を訴求。国内外の事故事例などを参考とした県下での手探りの初期対応、国内外からの注目など、原子力災害の初動の記録と記憶を、証言などをもとに振り返り、後世への教訓の場とする。

【展示項目】
 ・避難の開始
 ・県内全域に広がる不安
 ・国内外からの支援・反応



■展示イメージ



【避難の開始、県内全域に広がる不安】

混乱、困惑する社会と人々の記録を、放射線の影響や避難指示区域、避難所の推移などの情報と共に伝える。

【展示資料イメージ】



避難の経緯を示す資料

国内外からの支援を示す資料

3.展示内容 –各ゾーンの展示計画–

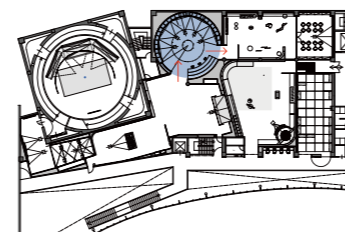
4.県民の想い ～県下全域の「記憶」と「記録」～

【概要】

安全神話の中にあつた、平穏な「故郷の日常」と、原子力発電所事故後にその「日常」がどのように変わってしまったのか、県民の想いを、「記憶（証言・筆跡・手記等）」と、県下の「記録（事実・データ等）」を組み合わせ蓄積し発信。特に、原子力災害による風評被害、それに伴う産業への打撃、放射線に対する理解の違いなど、原子力災害特有の事象を中心に後世に残す。

【展示項目】

- ・県民の想い



2F Keyplan

■展示イメージ



【県民の想い】

事故前から現在までの「県民の想い」を、映像と関連する実物資料を交えて紹介する。

【展示資料イメージ】



事故前の日常に関連する資料



事故後の変化を表す資料

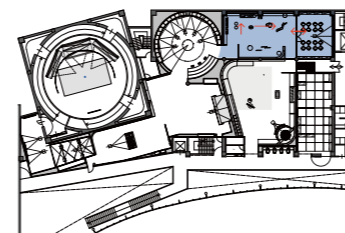
5.原子力災害の影響と対応（長期化） ～教訓を活かす原子力防災～

【概要】

原子力災害が長期化する中で、ふくしま（特に避難市町村）がどのように対応してきたか、原子力災害の「影響」とその「対応」、そして「教訓」を資料や体験を通して学ぶことで、原子力防災につなげる。放射線測定機器や防護服など、場面場面で登場した機器を原子力防災に関する教育や企業等の研修に活用し、気づき・学びを提供する場とし、県民健康調査等の状況を伝える。

【展示項目】

- ・風評被害
- ・除染
- ・健康不安への対応
- ・長期避難
- ・健康不安への対応
- ・研修・ワークショップスペース



2F Keyplan

■展示イメージ



【原子力災害の影響と対応（長期化）】

長期化する原子力災害による影響と対応、そして教訓までを風評被害、除染、長期避難、健康不安への対応のテーマで伝える。また、コンテンツは常に最新の情報に更新可能なシステムとする。



【研修・ワークショップスペース】

原子力防災学習やワークショップ、研修が実施できるスペース。様々な資料、機器、装置を活用したデモや体験を可能とする。

【展示資料イメージ】



健康不安へ対応した資料等（食品検査機）



除染に関する資料等（フレコンバッグ）

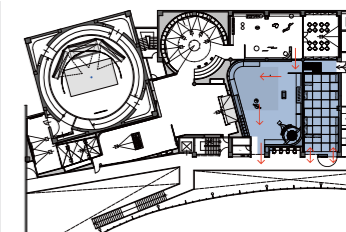
6.復興への挑戦

【概要】

逆境を乗り越え、新たな農作物の栽培法の模索や取り組みなどの事例を通して、復興に挑戦するふくしまを紹介する。避難により離れざるを得なかった故郷へもう一度戻り、新しいまちづくりをすすめる、この世界初の取り組み、将来像をリアルタイムに発信。人、産業、暮らし、など生活をとりまく多くのシーンでうけた風評被害の克服の過程、国を挙げてのチャレンジ、これらの状況を開示し、復興を実感、避難者の帰還を促進する。

【展示項目】

- ・行政による復興への取り組み
- ・県民による復興への取り組み（チャレンジ!ふくしま）
- ・廃炉の今
- ・みらいの街
- ・企業ブース・企画展示スペース



2F Keyplan

■展示イメージ



【行政による復興への取り組み】

福島イノベーション・コースト構想を始め、県内の復興に関する取り組みの経過と最新情報を伝える。



【廃炉の今、みらいの街】

福島第一原子力発電所の廃炉状況についての経過と現状を伝える。また、展示の締めくくりとして来館者が思い描く「みらいの街」を想像してもらい、県民の未来へのメッセージと共に伝える。

【展示資料イメージ】



福島イノベーション・コースト構想に関する資料



県民による復興への取り組みに関する資料

展示計画における配慮事項

◆ユニバーサルデザインの採用

子どもから高齢者、外国人、全ての利用者にやさしい施設を実現するため、空間・展示ケース等（ハード）と情報（ソフト）、2つの観点からユニバーサルデザインを採用する

〈展示空間のユニバーサルデザイン〉

- ゆったりとした動線幅を確保
- 安全に配慮したデザイン
- 車椅子利用者への配慮
- 視認性を高める展示室内の照度設定

〈情報のユニバーサルデザイン〉

- 多言語対応
- 来館者に合わせた情報提供
- 配色・フォントの配慮

◆維持管理・運営効率の向上

展示のフレキシブルな更新性や、維持管理コストの低減にも十分配慮する

〈維持管理負担の低減〉

- LED照明の採用
- レーザーorLEDプロジェクターの採用

〈更新性の確保〉

- 情報更新が容易な解説パネルシステムの導入
- 情報コンテンツの一元管理